

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名

いやなが保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

「みーつけた！」 1歳児

<テーマの設定理由>

1歳児は、積み木で「〇〇ができた!」、園庭の石のその形や色等から「これ〇〇みたい!」と見立てて遊び楽しんでいる。子どもが発した「みーつけた!」という見立て遊びを通して子どもの想像力や表現力と他者と共有する力を一層育むことをねらいとした。

2. 活動スケジュール

【4月】テーマ決定、 問いの検討、環境デザインの検討

【6月】探究活動の実践/2回

- ・絵本「はまべには いしがいっぱい」を見る。石を身近な物に見立てて遊ぶ。

【7月】探究活動の実践/2回

- ・七夕の話をきく シフォン布とカラーボールを星に見立てて遊ぶ。
- ・絵本「まぜてまぜて」「いろいろばあ」を見る。色水をジュースに見立てて遊ぶ。

【8月】探究活動の実践/2回

- ・色水を自分で作り、ジュースに見立てて遊ぶ。
- ・絵本「つみき」「つみきでとんとん」を見る。積み木を身近な物に見立てて遊ぶ。

【10月】途中経過のまとめ

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

【見立てた素材】

- ・玉砂利、青いシフォン布・カラーボール、色水、積み木

【見立てたものを見せ合う台】

- ・テーブル、コンテナ

【見立てのきっかけになる教材】

(絵本)「はまべには いしがいっぱい」 好学社/「まぜてまぜて」 PHP研究所

「いろいろばあ」 えほんの杜/「つみき」 金の星社/「つみきでとんとん」 金の星社

(お話) 七夕の話

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ・1歳児が「見立て遊び」を十分に楽しめるよう、きっかけとなる絵本の読み聞かせやお話の後に、保育者の言葉で子どもたちの経験と見立てた物をつなげることを意識した。
- ・見立て遊びに発展しやすい素材を工夫して提示し、「これ、何に見える?」と問いかけることで、子どもの自由な発想を促した。
- ・子どもが「自分で見つけた」という満足感を持ち、「もっと見つけたい」という好奇心を伸ばせるよう、保育者は「ほんとね、〇〇みたいね」と共感的に応じ、その発見を友達や他の職員、保護者と共有する場を設け、楽しさが話題となるようにした。

<活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

- ・絵本「はまべには いしがいっぱい」を読んだ後、園庭の玉砂利をバケツに入れ、子どもたちが身近な石を見立てて遊んだ。初めは、バケツから石を繰返し出し入れし「いし」「いっぱい入ったよ」と喜んでいた。
- ・子どもが食べる動作をした際に、保育者が「おにぎりみたいね」と声をかけると、「家でおにぎり食べた」と自分の経験を関連付けて話す姿が見られた。2回目の活動では、多くの石から選べるようにした。子どもは平たい石を選び「パンケーキ」と言い、自分のTシャツの絵柄と重ね合わせ見せていた。
- ・七夕のお話を全体で聞いた後、保育者が青いシフォン布の両端を持ち「天の川」を表現し、カラーボールを星に見立てた。子どもたちは頭上を動くボールを目で追い、上下する布から伝わる風を感じていた。また、手を挙げて星に見立てたボールを取ろうとする仕草やシフォン布と一緒に揺らす仕草も見られた。
- ・日常の中で絵本「まぜてまぜて」「いろいろばあ」を繰返し読んだ。「まぜてまぜて」は、保育者が絵本を揺らして混ざる表現した。「いろいろばあ」は、「〇〇いろ〜!」と友達と声を合わせ、色が混ざる変化があった。その後、2歳児の色水遊びを間近で見たことで刺激を受け、色水をジュースに見立てて遊んだ。2歳児に「何の味がいい?」と聞かれると、紫色の色水を指さして「ブルーベリー」と答え、友達と飲むまねをして満足そうにしていた。
- ・色水遊びの2回目では、「ん、ん」と声を出して自分で作りたい意思を示した。ヨウシュヤマゴボウを入れたビニール袋を揉み、初めての素材で色水を作った。友達の活動や、保育者が「おいしそうなブルーベリージュース」と言葉を添えたことで、楽しい雰囲気の中で経験することができた。
- ・絵本「つみき」を見て、積み木が崩れる場面を喜び、積み木遊びでも積んでは崩すことを繰返し楽しんだ。見立て遊びへの発展をねらい、「つみきでとんとん」を読み聞かせた。積み木を積み上げてキリンが出来上がる場面では、「キリン!」と立ち上がって喜び、他のページでもキリンを探す姿が見られた。しかし、その後の積み木遊びでは崩すことを楽しむ姿が中心で、見立て遊びに発展する様子は見られなかった。



石の見立て遊び



天の川と星



2歳児が作った色水



色水ジュース作り

5. 振り返り

<振り返りによって得た保育者の気づき>

- ・子どもが見立て遊びを楽しむためには、保育者自身が繰返し見立て遊びを楽しみ、その面白さを伝えていくことが大切であると感じた。その中で子どもが「面白い」と感じて発した言葉を受け止める積み重ねが、保育者とのつながりを深め、子どもの探究活動へと発展すると考えた。
- ・活動の繰返しや年上児の姿に触れることが、1歳児にとって新しい遊びへのきっかけとなり、好奇心を引き出す効果があると気づいた。
- ・絵本を繰返し読み聞かせたり、見立てに使った絵本や素材を手にとれる場所に置いたり、話題にすることで、子どもたちは自分の生活と結び付けて思いを巡らせていると感じた。
- ・石を自分で選ぶことにより、「自分が選んだ石」という思いが生まれ、他者に見せたい気持ちにつながった。共有の場（テーブルやコンテナ）を設けることで、ほかの職員からも声をかけてもらい、子どもは嬉しそうにしていた。自分の体験を自分で選んだもので共有する事は分かりやすく、会話の広がりにもつながった。
- ・色水を自分で作る体験では、「おいしそうなブルーベリージュースを作りたい」という思いをもち、とても積極的に取り組んでいた。当園がブルーベリー発祥の地である小平市にあり、ブルーベリーに親しむ活動を行っていることから、子どもがより身近に感じられたのではないかと考えた。
- ・1歳児の見立て遊びでは、子どもの言葉がまだ少ないため、保育者が子どもの反応や表情を丁寧に読み取り、共感したり言葉で代弁したりすることで、子どもが遊びの楽しさを感じられるようにすることが大切だと感じた。